

# 大和国京南辺条条里地割の規格について

藤 井 暁

はじめに

条里地割は旧畿内、とくに奈良盆地において条里に関する小字を伴つて密に分布している。この奈良盆地では中世に興福寺などの大寺院が権勢をふるい、多くの莊園を営んでいたため、土地関係史料が数多く残存し、その中には、条里に関する史料が多く含まれていた。地割や小字だけではなく、こうした史料の利用が可能であつたため、奈良盆地の条里復原が比較的容易で、条里研究には膨大な蓄積がある。

条里地割の復原的研究は、幕末の国学者であつた北浦定政が『平城京大内裏跡坪割之図』及び『大和国班田略図』によつて平城京条坊と奈良盆地の条里を復原したことに始まる。<sup>(1)</sup> これをもとにして、奈良盆地の本格的な研究を始めたのが関野貞である。関野は、平城京周辺の京北・京東・京南条里(図1)は本来連続したものであり、条里の上に条坊が施行され、条里呼称や地番は平城京造営以後に成立したと主張した。これに対して、喜田貞吉は尺度の問題から京東条里の施行は平城京以後によるものであつたとした。<sup>(2)</sup>

昭和初期からの条里研究は条里地割論、起源論、条里村落論、条里景觀論、地方条里論に分化し、奈良盆地においてもこれらを課題として進められた。<sup>(3)</sup> その中で、秋山日出男は盆地全域の条里復原を行つたうえで、盆地内の条里は単一の規格ではなく、郡単位でその施行時期や技術に違いがあると指摘した。<sup>(4)</sup> これ以後の条里研究は、このこ

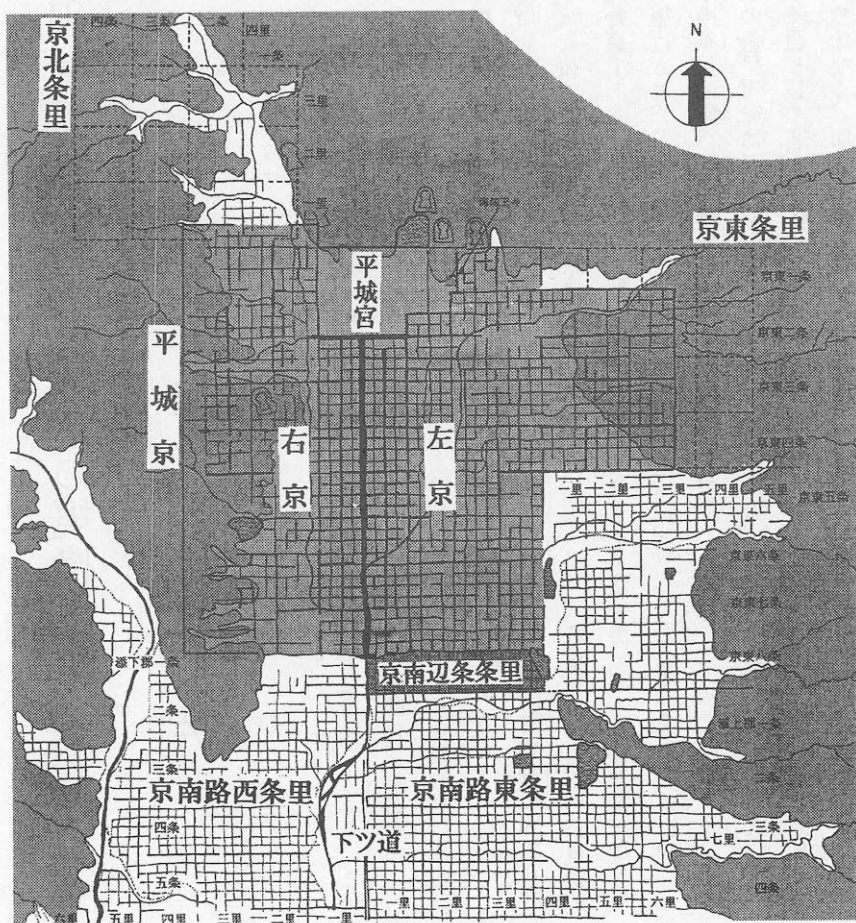


図1 奈良盆地北部の条里と条坊

(井上和人『日本古代都城制条里制の実証的研究』、2004年所収図を引用)

とに基づいて、より正確な条里景觀の復原を目指した<sup>(5)</sup>。その集大成が、奈良盆地における重層的な歴史の中で形成された現状の地割から、条里景觀の復原を目指した『大和国条里復原図』<sup>(6)</sup>である。

これに対して、坪単位での地割に均一性が欠けることを認めつつ、条里地割が整然と連続し、その地割に行政区画（添上郡・城上郡・十市郡など）と下ツ道との位置関係（路東・路西）を併用する条里呼称を用い、郡ごとに条・里の数詞を改めるのではなく、盆地のほぼ全域に統一的な地番を付けるといふこのきわめて体系的に整備された条里地割を井上和人は「大和統一条里」<sup>(7)</sup>と呼んだ。それは、関野が京北・京東・京南条里が本来連続した地割であったとした主張を受け継いだもので、平城宮の東に隣接する海龍王寺付近の地割が条里地割の規格と一致することから、平城京条坊内に条里地割が存在する場合があることを示すことによって、条里が平城京造営に先行するため、大和統一条里全域が平城京造営以前に統一的に設定されたとする考えである<sup>(8)</sup>。

これらの見解は、奈良盆地の条里の施行時期については異なるが、平城京周辺の条里地割の規格は厳密に設定されたものではなく、京北、京東、京南条里はそれぞれ連続した条里地割であったとする点において一致している。さらに、井上の考えに従えば、平城京内に存在する条里地割の痕跡もまたその中の一部として位置付けられている。しかし、平城京の南に接する京南辺条里（以後、京南辺条とする）は、この連続していたと考えられる条里地割の中に孤立して存在しており、その点においてきわめて特殊であったといえる。

そこで、周囲から孤立し、京北・京東・京南の各条里の連続性を乱しているこの京南辺条について、その形態や規格、条里呼称を整理することによって京南辺条の成立を考え、京南辺条条里と連続する周辺条里、さらには条坊との関係について論じていきたい。

## 第一章 添上・添下郡の条里に関する研究史

平城京城は古代の行政区画では奈良盆地北端の添上郡と添下郡に属していた。この地域には京城の他に京北条里や京東条里、京南条里北端部（路東で六条と七条の一部、路西で七条と八条の一部まで）に分かれ、岩本次郎や井上がこれらの個別条里地区に関する研究を行っている。<sup>③</sup>また、添上郡にはこれらの条里地区に囲まれた带状の条里地区がある。そこは南北幅約四町、東西約二〇町という带状の特殊な形態をしていたため、京南条里とは別に京南辺条と呼ばれている。

この京南辺条に最初に注目したのは秋山で、その地割は一〇六m四方の方格地割（代制地割）であったとして、平城京造営、さらに現地表面上に遺されている多くの条里地割の施行よりも以前に遡る地割であると主張した。<sup>⑩</sup>これに対して、岩本は「京南辺条里と路東条里の間には幅約三四mの带状の道路敷痕跡が認められ、この古道が路東条里の起点」となり、「地割の規格は一〇〇・九m×一一〇・五mとなっているため、京南辺条は古地割ではなく、平城京造営に伴って区画整理した地割であった」としている。<sup>⑪</sup>

阿部義平は都城研究の立場から、平城京は藤原京の造営計画に倣って一〇×一〇里の予定で設計され、京南辺条域は京城南端に組み込まれており、平城京の一部であったとする。さらに、地形を考慮することで、羅城と共に東西の丘陵線や五徳池との接合による一種の城郭都市を実現していたとする。<sup>⑫</sup>また、井上は大和国内の都城と条里に関する研究を精力的に行っている。それによれば、京東、京南、京北条里、それぞれの地割の関係を論じ、奈良盆地全域が連続した一連の条里地割であるという大和統一条里の造営開始時期を七世紀第四々半世紀頃、遅くとも平城京造営以前に遡り得るとしている。<sup>⑬</sup>このように、平城京周辺の条里は連続した条里であったとする一方で、これらに囲まれた京南辺条については、その東西と南北（道路遺構を除外した値）の比率が五対一（六〇〇〇大尺対一

二〇〇大尺〕となることから計画的に施行された特殊条里地区であり、さらにその造営方位が平城京九条大路の造営方位と一致するため、「京南辺条条里区は平城京と同時に設定された」とする。<sup>(14)</sup> このように、奈良盆地北部の各条里地区の中で、京南辺条だけが平城京と同時に設置された空間であつたとされているのである。

しかし、現在の地表面に現れている地割は重層的な歴史の中で形成されたものであり、直接的にその起源と結び付けることはできない。そのため、京南辺条という空間が形成されていった過程を明らかにしていくことが必要なのである。

## 第二章 京南辺条条里の地割について

### 第一節 地割の造営方位

京南辺条は一条三里からなる変則的な条里地区で、その大きさは南北四町、東西二〇町である。各里は一里からそれぞれ東西六町、三町、一一町であつたといわれている。この京南辺条の地割の造営方位は正方位ではないことが指摘されている<sup>(15)</sup>。京南辺条に関するものではないが、この地域の地割の造営方位は、木全敬蔵が京南条里、山中が平城京の造営方位を求めた<sup>(16)</sup>（表1）。

それによれば、路東条里について、東西地割線は路東一条が京南条里の中で最も振れが大きい八九度一五分であり、南北地割線は一里から七里にかけて〇度一七分前後から〇度三〇分前後になるといふように東側の振れが大きいことを示し、平城京条坊の造営方位は、東西条坊が平均八九度四二分七秒、南北条坊の右京が〇度二〇分九秒、左京が〇度一八分一四秒であるとしている。さらに井上は九条大路の偏向度合が他の大路よりも過大であることに注目して、これとほぼ同じ方位である京南辺条は平城京造営に伴って設置された空間であつたとする。<sup>(17)</sup>

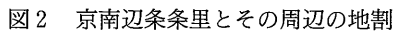


図2 京南辺条条里とその周辺の地割

表1 平城京条坊とその周辺条里の地割造営方位

平城京

	造営方位	
朱雀大路	0° 15' 41"	註1
左京	0° 18' 14"	註1
右京	0° 20' 09"	註1
南京極大路	89° 14' 29"	

京南辺条

南北地割線	0° 19' 30"
東西地割線	89° 15' 04"

路東条里南北地割線 註2

条	里	造営方位
1	1	0° 17' 32"
	2	0° 14' 59"
	3	0° 16' 53"
	4	0° 17' 32"
	5	0° 18' 15"
	6	0° 19' 54"
2	1	0° 19' 58"
	2	0° 21' 23"
	3	0° 21' 48"
	4	0° 20' 01"
	5	0° 24' 18"
	6	0° 25' 14"

路東条里東西地割線 註2

条	造営方位
1	89° 15' 04"
2	89° 28' 46"
3	89° 50' 16"
4	90° 03' 08"

※東西の偏角は北より西への角度、南北は北から右回りに測った角度を指す。  
 註1は山中章『日本古代都城の研究』、註2は『奈良県史』のものを引用した。

京南辺条一〇三里までの南北里界線は約〇度一九分三〇秒で<sup>⑮</sup>あり、路東条里一条と平城京左京の造営方位と一致する。しかし、図2に示したように東西地割線は京南辺条と路東条里一条とでは偏角が異なっている。京南辺条と道路敷痕跡（岩本に従い、この呼称を用いる）の地割は八九度一五分〇四秒の方位であるが、ここより南は八九度四二分である。僅かな誤差であるとはいえ、下ツ道と中ツ道間で南北約一〇mの誤差が生じることとなり、連続した地割においてここまでの差が生じている地域はほとんど見られない。これらを比較すると、井上がいうように、京南辺条の東西・南北地割線は平城京左京南部の地割とほぼ同じ造営方位であると認められる。

## 第二節 地割の規格

京南辺条の条里地割は、平城京条坊と接する京南辺条北端の坪を含めた数値によって各坪の平均値を示す場合が多かった。また、岩本によって、京南辺条には様々な規格の坪が存在するとされたが、その数値がどの位置を示すのかは提示されておらず、どこに、どの規格の坪が分布するのかを明らかにしておかねばならない。なお、京南辺条の各坪辺長の計測には、千分の

一『大和郡山市地番図』<sup>19</sup>ならびに二千分の一『平城京条坊総合地図』<sup>20</sup>などを用いた。

京南辺条二行目↖平城京東京極推定地の延長線まで(図3・②↖②⑩間)の各東西地割線の平均は約二〇二一・八mを示す(以後、南北に並ぶ坪を西から「↖行」目、東西に並ぶ坪を北から「↖列」目などとする。「行」は図3①↖②⑩に、「列」は①↖⑤に対応する)。これに現在佐保川流路となっている、京南辺条西端にあるべき一行分(図3・①)を加えると二二二七・八↖二二三〇・八mとなるはずであり、ほぼ六〇〇〇大尺(二二二七・六m)に相当する結果が得られる。これは、平城京羅城門東端付近↖東京極間(左・右京はそれぞれ東西六〇〇〇大尺)において計測しているため、当然の数値であり、一坪が一〇六m四方であつたならば、ちょうど二〇坪分にあたる。

しかし、実際に各区画を計測していくと次のようなことが分かる。京南辺条の条里地割は西端一行が佐保川、東端三行が五徳池・集落によつて乱れている。まず、これらを除いた坪界一七ヶ所において計測した京南辺条の総南北辺長の平均は約四六一・六mである(図3・①↖⑤間)。この中には古道敷痕跡といわれている小字「道代」などの南北幅平均約三五・九mの帯状地割(図3・⑤)が含まれているため、これを除いた四列分の南北辺長は約四二五・七mである。これは、井上のいうように、一二〇〇大尺(約四二五・五二m)と大差ない。しかし、北端一列の南北辺長は明らかに短く、平均約九九・六mである(図3・①)。この北端と南端の間の三列分の南北辺長は全て似た数値を示し、一坪は約一〇八・七mである。すなわち、京南辺条の各列ごとの南北辺長は、北から九九・六m、一〇八・七m、一〇八・七m、一〇八・七m、三五・九mとなっている。

次に、各里の東西距離は一条一里↖約五三五・五m(二坪あたり約一〇七・一m)、同二里↖約三二七m(同一〇九m)、同三里↖約一一五九・三m(同一〇五・四m)である。これを見れば坪の大きさにばらつきが多いとされてきたことも仕方がないものである。そこで、各行ごとに東西辺長平均を出すと、多くの坪が一〇九mに近い数値を示すことが分かる(表2・図3)。



表2 京南辺条における各坪の東西辺長

条	里	No.	平均東西辺長	各里平均(m)
1	1	1		107.1
		2	106.0	
		3	111.5	
		4	100.5	
		5	112.0	
		6	105.6	
	2	7	108.8	109.0
		8	108.2	
		9	110.0	
	3	10	110.0	105.4
		11	108.6	
		12	107.6	
		13	90.0	
		14	108.4	
		15	108.4	
		16	108.5	
		17	108.8	
		18	132.0	
		19		
		20	177.0	

※1 空白部は計測困難なため数値を示していない。

※2 Noは西から何行目かを表し、図3①～⑳と対応する。

て一里のみ東西六町で里を形成していたことは興味深い点である。

一三行目(図3・⑬)の東西辺長は、約九〇mである。その区画の東端には南北に連なった帯状の小字「上・中・下ツク田」が見られる。この帯状の区画は岩本が指摘するように、平城京設置と共に掘削されたと考えられている東堀川の流路とよく整合する。この区画が属していた京南辺条三里は、天平宝字五年(七六一)、興福寺(山階寺)に勅施入された「京南田四十町」に比定され、それ以前は太政官の雑用などに充てられていた乗田であったと推定されている。この小字「上・中・下ツク田」の周辺地域が天平宝字五年に興福寺領になったとすれば、この小

しかし、この中には、条里地割の規格とは全く異なった区画が数箇所見られる。まず、京南辺条一条一里は、二行目(六行目の東西辺長が西から約一〇六m、一一一・五m、一〇〇・五m、一一二m、一〇五・五mとなっている。東西辺長が特に短くなっている四行目を除いた平均は約一〇八・八mとなるため、一見条里地割と大差ないかのように見える。しかし、京南辺条と路東条里一条の南北地割線は約九mのズレが確認できる。この理由を明らかにすることは出来ないが、京南辺条におい

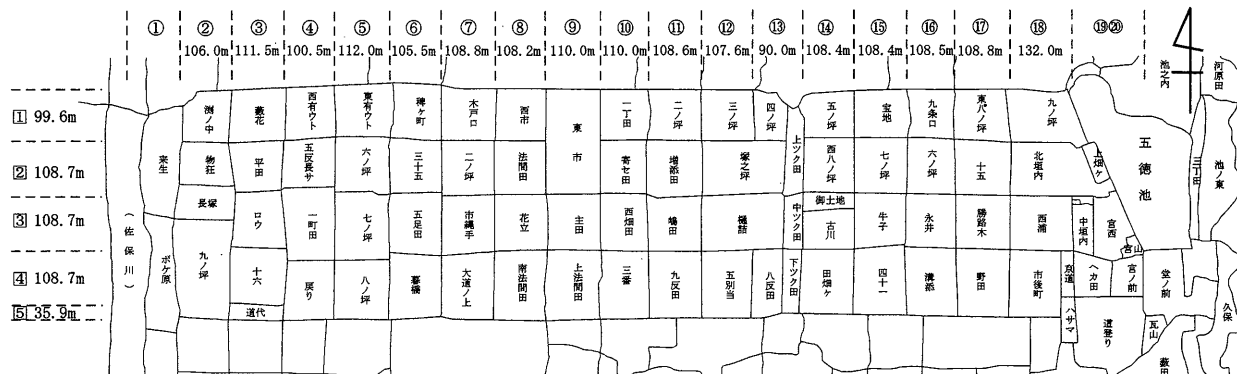


図3 京南辺条里地区の坪割とその規格（『奈良県史』第4巻条里制、P73所収「小字限図」より作成）  
※ ……は坪界線の一部を基準として配置したものであるため、坪の辺長がその間の距離に反映しているわけではない。

字は古代から中世にかけて莊園・公領制として設定され、領主の直営田であつた佃に由来すると思われる。なぜならば、このような細長い区画が興福寺へ施入された後に、改めて設定されたとは考えにくく、天平宝字五年以後に耕地へ変更されたと考えられ、八世紀前半のこの区画はやはり東堀川の一部であつたと考えられるためである。また、この北方には東市が位置していたことから、東堀川は運河のような役割を果たしたのだろう。

一八行目(図3・⑱)の東西辺長は約一三二mである。これは中ツ道に比定されている小字「京道」とこれに連続する带状地割の幅員を含んでいるために、東西辺長が長い区画となつていると考えられている。ここより東の一・二〇行目は五徳池や北之庄集落によって地割が乱れているため、計測は困難であるが、井上は平城京東京極の延長線と、五徳池南の水路が北に屈曲する部分とが一致することを受けて、東京極延長線上が京南辺条の東端であるとした。<sup>(24)</sup> こうすると一・二〇行目の東西辺長合計が約一七七mとなる。しかし、五徳池の東端線は自然な曲線を描いておらず、直線に近い形状を持ち、ここから小字「京道」までの距離は二二〇m強であるため、ほぼ条里二町分に相当する。『大和国条里復原図』ではこの地点を京南辺条の東端と捉えている。

これらのうち、一三・一八行目の東西辺長がこのようになることは、中ツ道の存在がその要因に挙げられる。京南辺条には、下ツ道と中ツ道が南北に通過していた。このうち、中ツ道は路東条里一条を境として、形態が異なっている。それは、路東条里一条以南の中ツ道が条里地割内に組み込まれているのに対して、京南辺条部における中ツ道は隣接する坪からその幅員は除外されているという違いである。<sup>(25)</sup>

そこで中ツ道が周囲の地割からどのように存在していたのかを見ていく。一八行目の東西辺長は一三二mであるが、中ツ道の遺構地割である小字「京道」を除くと、その東西辺長(小字「市後町」)は約一〇九mである。ここで注目すべきは、一三〜一八行目までの距離が約六五六・一m(一町あたり一〇九・三五m)となり、条里一里分に相当する数値が得られることである。中ツ道はこの区画の東端に隣接し、そこから京東条里八条一・二里里界線

まではほぼ六町である。これらの点から、京南辺条部での中ツ道の幅員は現状の条里地割から除外されていることが分かる。しかし、一〇一八行目までの距離（約一九五四m、一町あたり約一〇八・六m）は条里三里分に近い数値を示し、この限られた範囲内で条里地割から中ツ道が完全に除外されていたということは、これによる歪みがどこかで生じるはずである。それが、京南辺条一三行目の東西辺長に現れたと考えられるのである。なぜならば、一三行目と一八行目の東西辺長の平均は約一一一mとなり、より条里地割の規格に近い数値を示し、それぞれが一里分の区画の西端と東端の坪にあたるため、一定の計画性を見出すこともできるからである。この数値は条里地割より若干長いものであるが、奈良盆地の条里地割は、（特に例外的なものを除くと）坪の辺長が約一〇六―一一二mまで幅広く分布し、細部まで統一<sup>27</sup>されていたわけではないと指摘されていることから見れば、それほど大きな問題とはならないのではないだろうか。以上のように、これらの坪が道路に規制されたことよって不規則な東西辺長となったのであれば、それは全国的に見られる事例である。京南辺条と路東条里一条はそれぞれ下ツ道と中ツ道間の距離がほとんど変わらないにも関わらず、京南辺条では中ツ道の幅員を完全に除外した。そのため、隣接する坪以外の場所で東西辺長を調整する場所が必要となったのである。それが、東西辺長が他とは明らかに異なる一三行目であったと考えられる。

特殊な規格を持つ最後の例として、北端の一列が挙げられる（図3・①）。これは南北幅が約九九・六mしかなく、条里地割からは一〇m程も短い南北辺長となっている。これと似た状況が京東条里でも見られ、その共通点は平城京と接していたことである。ただし、京東条里では、平城京左京の東・同外京の南に接していたため、南北幅と東西幅が六町に満たない里となり、前者が京東五条一〇四里北縁部、後者が京東五〇八条一里西縁部である。

このような形状となった手がかりとなるのが、一四世紀の『尼妙法田地寄進状』である。これには「左京五条一里三六坪字葛木」とある。京東条里五条一里西南隅と東南隅には、現在、「桂木町」という町名と「葛木」という

小字があるため、この「左京五条一里」は「京東五条一里」を指していたと考えられる。しかし、この史料には「三六坪」という表記が見られるにも関わらず、京東五条一里の現状の条里地割は三六坪分が存在していないのである。それは京東五条一里が三六坪で形成されていた時があったことを物語り、このような規格の坪が京東八条まで続いている。そのため、この史料は条里の上に条坊が成立したということを示し、この京東条里西端と同じような規格の坪が存在する京南辺条も同じ状況であったと考えられる。

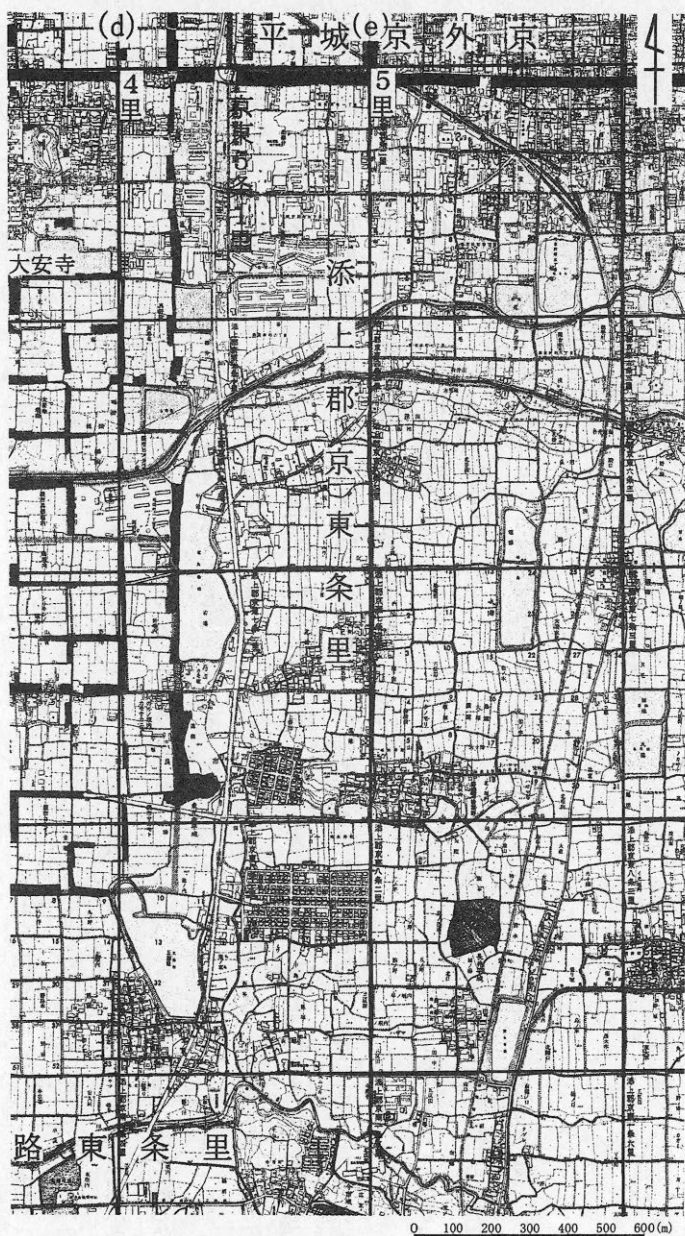
この平城京との接点であるという特殊な事情を考慮して、京南辺条北端の一行は除くと、京南辺条内は約一〇九m四方の坪が多くを占めることとなり、京南辺条が特殊条里であったとする根拠の一つが失われることとなる。そして、同じような形態を持つ京南辺条と京東条里は条坊によって地割の規格が乱された坪が存在するという共通点から、平城京造営以前には連続した地割であったと考えられるのである。

このように、京南辺条の地割自体は特殊ではなかったとすれば、六町四方での条里復原が可能はずである。実際に、中ツ道は条里里界線と一致し、京南辺条における下ツ道と中ツ道までの東西一八坪を一六、七、一二、一三、一八行目の三区画に分けると、それぞれの東西距離は六五四m前後であることも注目すべき点である。

### 第三章 京南辺条条里と周辺地割との関係

#### 第一節 京南辺条とその周辺条里

京北・京東条里は平城京造営よりも古く、条・里界線の位置は現存する京南条里と共通し、平城京造営以前まで遡ると指摘されている。<sup>(28)</sup>しかし、京南辺条はこのような盆地全域を体系的に造成された地割であったとする大和統一条里の一部として論じられることはなかった。そのため、京南辺条とその周辺地割との関係を明らかにすること



復原図（『大和国条里復原図』に加筆）

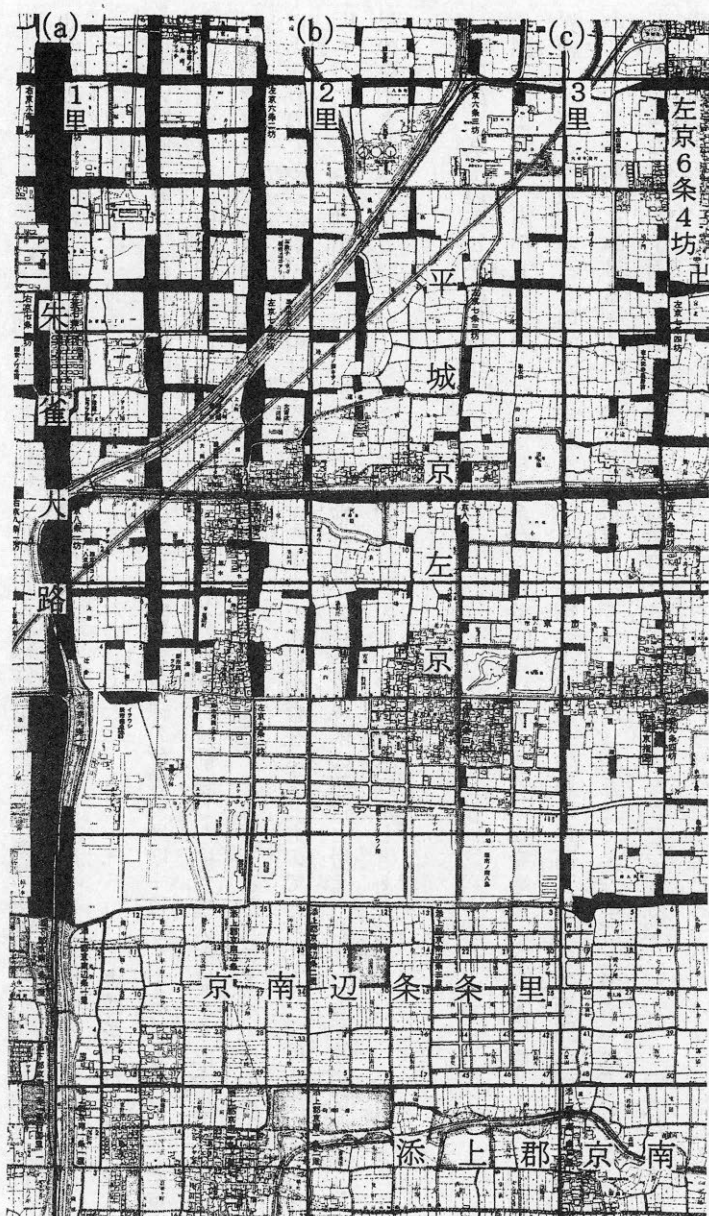


図4 平城京城内とその周辺における条里

が必要なのである。

前章で京南辺条一〇一八行目までを東西六町で区画できるのではないかと述べた。そこで、試みとして、京東条里を基点とした六町四方の区画で条里復原を行った<sup>(29)</sup>(図4)。この条里を、仮に西から一里(a-b)、二里(b-c)、…、と呼ぶことにする。これによれば、各南北里界線は京東条里と京南路東条里の南北地割線と整合する。そのため、井上のいうように、この地域一帯の条里もまた六町四方の里が形成されていたと考えられる。

その中で京南辺条は、前述したように京南辺条一〇六、七〇一二、一三〇一八行目の東西がそれぞれ東西六五四mに近い数値であり、これらの境界線が図4に示した南北里界線の位置とほぼ一致していることが分かる。京南辺条と京南条里とで南北地割線に若干のずれが認められるが、これは前述した中ツ道の形態が京南条里と京南辺条の部分とで異なっているためにこのような違いが現れたと考えられる。これがそれぞれの条里地区の施行時期の違いによるものであるのか、あるいは京南辺条と京南条里の古道の存在によるものであるのか、現時点ではその理由を明らかにすることは出来ないが、それぞれの地割は平城京造営以前の施行と考えられることや里の区画から見た条里の整然さが失われていないことから、統一的な計画のもとで施行されたと考えられる。

## 第二節 京南辺条と平城京条坊

図4によれば、南都七大寺の一つで、平城京左京六条四坊に所在する大安寺寺域<sup>(30)</sup>の東端を区画する条坊が南北里界線(d)と一致する。この大安寺寺域を画する条坊街路の幅員を除いた東西辺長(条坊街路の内側)は約五三〇mである。平城京における一坊の条坊心々間距離は一五〇〇大尺(約五三一・九m)と考えられているから、数値上で大安寺の東西を区画した四坊大路と小路の幅員はほとんどなかったことになる。しかし、この大路と小路の幅員は地割として遺されている。そのため、条坊内にはその規格から外れた場所があったということになる。



このように南北里界線（d）とこの寺域東端（左京六条四坊九〇一二町）が一致すると同時に、大安寺寺域内の街路は京東条里の東西地割線の延長線と比較的よく連続する。寺域が平城京造営当初から変化していないのかどうかまでは言及することが出来ないが、奈良時代に創建された寺院の四至の一部とその内部の街路が条里推定線と整合する。これは、井上が平城宮の脇に立地していた海竜王寺周辺の地割から、条坊内にも条里地割と同一規格の地割が存在することを指摘したと同じような状況である。

さらに広域を見ていくと、南北里界線（b）・（c）も南北条坊地割線と一致している。しかし、概念上で、条里六町（約六五四m、一町 $\parallel$ 約一〇九m）に対して、これに最も近い数値を示すのは条坊五町（心々間距離 $\parallel$ 約六六五m、一町 $\parallel$ 約一三三m）であり、一里分の区間で約一一mの誤差が生じるはずである。そのため、南北里界線（b）・（d）が条坊地割線と一致していくことは両者の関係性を示す。しかし、（a）の里界線だけが条坊地割線と一致しない。この地点は朱雀大路の内側約一五〇mにあたり、下ツ道東端の延長線上にほぼ一致する（図5）。このことは、下ツ道は平城京羅城門よりも南に存在していただけではなく、羅城門以北にも存在していたことを物語るのである。平城京造営以前の下ツ道は奈良盆地をまさに縦断し、それが一部拡幅されることによって朱雀大路になったと考えられる。

このことによれば、南北里界線（a）は京南条里だけでなく、京東条里や京南辺条の起点になっていたと考えられ、これらの条里地区に共通点が認められることとなるのである。すなわち、平城京城（a $\sim$ e間）に京東条里や京南条里と連続する条里地割が存在し、それは朱雀大路として拡幅される以前の下ツ道 $\parallel$ 南北里界線（a）を起点としていたのである。京東条里の地割の施行が平城京造営以前に遡り得るという井上の考えに従えば、この条里もまた平城京造営以前の施行であったと考えられ、さらに南北里界線（a）・（d）が南北条坊地割と整合することや、左京六条四坊のように条坊が本来あるべき規格から外れて設定されている場合があることは、奈良盆地北部の

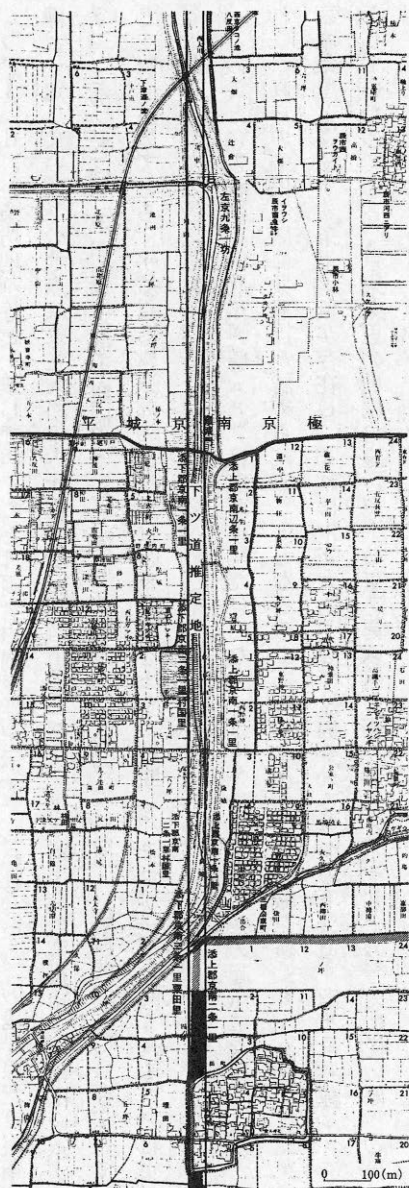


図5 下ツ道遺存地割と北部における延長線（平城京内）  
（『大和国条里復原図』を加筆）

条里と条坊は無関係に設置されていたわけではなく、条里は条坊を設定する際に一定の基準線としての役割を担う場合があったことを示している。なお、この南北里界線（b）～（d）が条坊街路の中軸線上にあたらないことは、平城京条坊の区画と街路が計画的に統一的な規格で造営されたわけではなく、区画の設定が街路幅の設定に先行すると考えられているため<sup>32)</sup>、この考えに従えば、条里は街路が敷設される以前の条坊区画を設定するのに利用されたと考えられる。

以上のように、平城京造営以前から盆地北端部にも下ツ道が存在し、これを基準とした京東条里と、これに連続する条里が下ツ道～京東条里（a～e）間に存在した。この平城京造営以前に存在した条里の南北里界線は条坊地

割線と一致する場合が多く、この条里を基準として京内の区画を設定し、下ツ道が拡幅されて朱雀大路となった。この後に、各区画を取り込んで各大路・小路が設置されていったと考えられる。

さらに、京南辺条の各南北坪界線に注目して、これと条坊地割線との接合関係を見ていくと、両者が一致する箇所が複数存在する。それは京南辺条南北坪界線全二ヶ所中九ヶ所（図3・①、②、⑥、⑦、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯）行目の各東端線）である。これは条里と条坊の規格の違いから見て異例の多さである。

京南辺条と京東・京南条里は、①それぞれ下ツ道から条里が始まる（と想定できる）ことや、②南北里界線が条坊地割線と整合すること、③平城京と接する坪の辺長が短くなっていることなどのような共通点を有し、京南辺条とその周辺の条里は統一的に施行されたものであったと考えられる。さらに、京東条里や京域内（海龍王寺付近）の地割の造成時期は平城京造営以前に遡る可能性が高いとされており、この考えに従えば、京南辺条の条里地割が造成された時期もまた平城京造営以前に求められる。これらの点から、京南辺条の地割線もまた平城京条坊の設置に際して、基準線としての役割を果たしたと考えられる。

## 第四章 大和国における条里呼称の変遷

### 第一節 大和統一条里の条里呼称

本章では、史料から見た大和国条里の形成過程を概観し、その中で京南辺条がどのように特殊条里となっていたのかを考察する。

金田章裕は、大和国の条里プランは平城京と下ツ道を基準として一つの体系としたものであるから、その完成は明らかに平城京造営以後であり、宝龜八年（七七七）の『大和国符』<sup>(34)</sup>（表3・No.4）に「路東二十二条三山部里九

	年 号	表 記	地区	史料名	所収
1	761 (天平宝字 5 年)	一區地三段在板倉一字板屋三字 東限朱雀路 南即広長口分田 西溝井小道 北車持朝臣仲智地	条坊	十市郡司解申立売實地券事	寧良遺文中巻(P362)
2	761 (天平宝字 5 年)	京南田40町、10町	京南辺条	類從三代格巻15	国史大系(P446)
3	767 (神護景雲元年)	路東11橋本田、路東12岡本田	路東	類從三代格巻15	国史大系(P445)
4	777 (宝龜 8 年)	路東22条3 山部里 9 麻生田・8 葛野田、23条2 耳梨里 5 画工田、23条3 上藤里 3 柏原田	十市郡路東	民部省藤川原寺三網所ほか	大日本古文書6(P597)
5	806 (大同元年)	添下郡京南 2 条 1 村国里17林田・19瓶田、3 条 1 粟田里 5 埋田	添下郡路西	大和国添下郡司解	平安遺文29
6	816 (弘仁 7 年)	添上郡春日郷 5 上春日里 5 坪	添上郡京東	雄豊王家地相替券分	平安遺文42
7	870 (貞観12年)	平群郡東条 1 平群里13・14坪	平群郡	某郷長解写	平安遺文163
8	872 (貞観14年)	東 5 条 5 上春日里□坪・同 4 春日里32坪	添上郡京東	石川滝雄家地売券	平安遺文166
9	879 (元慶 3 年)	京南 5 条 1 里34坪		大和国矢田郷長解	平安遺文173
10	891 (寛平 3 年)	城上郡22条 1 千代里21・22坪	城上郡	大神郷長解写	平安遺文178
11	922 (延喜22年)	平群郡竜田東条 1 里 6 坪	平群郡	信貴山寺資材帳写	平安遺文4904
12	935 (承平 5 年)	広瀬郡15条 3 里	広瀬郡	信貴山寺資材帳写	平安遺文4904
13	937 (承平 7 年)	平群郡 8 条14里 9・16坪、8 条15里 3 坪、9 条14里25・26坪	平群郡	信貴山寺資材帳写	平安遺文4904
14	950 (天曆 4 年)	添上郡京東 3 条 2 腹見里	添上郡京東	東大寺封戸莊園並寺用帳	平安遺文257
15	960 (天徳 4 年)	高市郡東25条 1 里15坪	高市郡路東	桑原刀自也粉失状案	平安遺文4563
16	969 (安和 2 年)	山辺郡穂積郷野之子庄田地… 8 条 4 里30坪	山辺郡	法勝院領目録	平安遺文969
17	989 (永延 3 年)	西16条 5 里 7・8・17～20坪、17条 5 里11～14・23・24坪	十市郡路西	太政官符案	平安遺文333
18	991 (正暦 2 年)	6 条 3 里33坪、7 条 3 里10・12・22・27・25・34・35坪	添上郡	春日庄文書	大日本古文書

表 3 10世紀以前における大和国の土地関係史料

麻生田一町」などとあることから、遅くともこの時までには確定していた、とする。また、神護景雲元年（七六七）の『太政官符』（表3・No.3）は、条里呼称が完成したとする宝亀八年のものと同義であるのかどうか検討が必要であるとも述べている。<sup>35)</sup>

この太政官符には、「大和国二町 一町路東十一橋本田。一町路東十二岡本田。在<sup>二</sup>高市郡高市里<sup>一</sup>古寺地西辺<sup>一</sup>」とあり、大安寺金堂、及び仏像の修理に高市郡高市里の「橋本田」と「岡本田」の二町を用いるとした勅である。ここに記載された高市郡では、一一・一二「条」、あるいは「里」は存在しなかったため、これらの数詞は坪に対応する数詞であつたと考えられる。なぜならば、この二町は「古寺地西辺」とあることから、狭い範囲で相並んだ区画を指していたと想定されるためである。しかし、その地域呼称は「高市郡高市里」のような固有名词により特定し、数詞の条・里に相当するものは見られず、同史料中の摂津国の場合は「一町九条五里三十五大針田 一町九条六里二丈針田」というように数詞による条里呼称が明記されている。つまり、神護景雲元年において、大和国の条里呼称は完全な形としては成立していなかったのである。

これ以前の史料は、天平宝字元年（七六一）『十市郡司解申立売買地券』（表3・No.1）のようなものである。そのため、大和国における数詞による条里呼称の完成は、金田が言うように、遅くとも宝亀八年（七七七）であり、神護景雲元年（七六七）の時点ではその完成の過渡期であるか、部分的にまだ完成していなかったかのいずれかということになる。このような状況の中で、最も早く地域を固有の名称で示すものが

(1) 天平宝字五年（七六一）閏八月二三日の勅（表3、No.2）<sup>37)</sup>

京南田四十町

右奉<sup>二</sup>為 藤原皇太后<sup>一</sup>。毎年忌日講<sup>二</sup>説梵<sup>一</sup>□經<sup>一</sup>□。永入<sup>二</sup>山階寺<sup>一</sup>。

大和国京南辺条条里地割の規格について

## 京南田十町

右奉<sup>二</sup>為<sup>一</sup> 藤原皇太后<sup>一</sup>。於<sup>三</sup>法華寺淨土院<sup>一</sup>。自<sup>三</sup>忌日初<sup>一</sup>逮<sup>三</sup>于七日<sup>一</sup>。毎年請<sup>三</sup>一屈淨行僧十人<sup>一</sup>。礼<sup>三</sup>一拜阿弥陀仏<sup>一</sup>□。永入<sup>三</sup>山階寺<sup>一</sup>。

である。これは条里呼称が成立し始める神護景雲元年（七六七）以前に、「路東」の他に見られる唯一の地域呼称であるが、条里呼称的な数詞は伴っていないため、条里呼称によるものではない。すなわち、大和国において最初に用いられた条里の地域呼称は「路東」であり（表3・No.3）、平城京造以前から下ツ道と条里が存在していたと考えられていることや前述した京五条一里の例が示すように「坪」に対応する数詞の存在は平城京造営以前に遡り得ることから、七世紀における奈良盆地の条里は下ツ道との位置関係によって認識され、神護景雲元年のような表記が用いられていたのではないかと考えられる。

では、この「京南」とは一体どのような場所を表記したものであったのだろうか。「京南」は「京北」・「京東」などの語と対応しており、平城京との位置関係によって付けられた呼称であった。まず、「京東」の初見は天曆五年（九五〇）『東大寺封戸莊園並寺用帳』であり、これよりも以前は「東」とされるのみであった（貞観一四年（八七二）『石川滝雄家地売券』、表3・No.8）。「京北」にいたっては、八〜九世紀の班田図の写しであり、一三世紀頃の作成であると考えられている『大和国添下郡京北班田図』<sup>(38)</sup>や一三世紀末頃の『西大寺田園目録』に若干見られるのみである。

これらに対して、「京南」は「京北」や「京東」に比べて早い時期から用いられ、その初見は（1）天平宝字五年（七六二）の勅であり、これ以後は「添下郡京南二条一里一七林田」（大同元年（八〇六）『大和国添下郡司解』、表3・No.5）のように表記された。さらに、一五世紀までの史料が示す「京南」の範囲は路東が六条、路西が八条

までであり、ちようど添上・添下郡の範圍と一致する。すなわち、条里呼称としての「京南」は八世紀末く九世紀初頭頃に使い始められ、平城京城以南の添上・添下両郡を指した呼称であつた。

八世紀初頭に添上・添下郡の一部に平城京が造営されたため、平城京城を中心とした「京東」・「京南」・「京北」という条里呼称が発生した。「京東」条里は添上郡北半部、「京北」条里は添下郡北端部に占地し(図1)、「京南」条里もまた添上・添下郡城南端までの範圍と一致する。つまり、これらの条里地区は添上・添下郡に施行されたものであり、郡単位での統一性が見られる。これは全国的に条里が郡ごとに施行されるのが一般的だったことと一致する。

このように、史料が示す京南の範圍は添上・添下郡城南端の境界線までの範圍と同じであり、平城京周辺の京東・京南・京北条里は両郡内に施行されていた条里に付けられた呼称であつたと考えられる。さらに、これらの条里は条坊の設置に先行すると考えられる平城京という特殊な条件を除くと、この地域には添上郡条里・添下郡条里というべき郡単位で施行された条里地割が存在していたと考えられるのである。

## 第二節 京南辺条の条里呼称

史料上の認識において、平城京造営以前の奈良盆地北部には添上郡条里・添下郡条里というべき条里が存在していた。その中で京南辺条がどのような経緯によつて、この連続した地割を乱す空間となつていったのかを考察していく。

大同元年(八〇六)から一五世紀までの史料に記載される「京南」の範圍は添上・添下郡の郡境と一致し、条里呼称としての「京南」は添上・添下両郡を示した呼称であつた。この考えにもとづけば、京南辺条は平城京の南に隣接していたため、「京南」とされていたとしてもおかしくはなかつたはずである。実際、(1)の「京南田十町・

四十町」はそれぞれ京南辺条二里と三里に比定されており、天平宝字五年（七六一）の京南辺条は「京南」であった。

しかし、条里呼称が完成した後の九世紀から用いられている「京南」は「条く里く田（坪）」のように表して場所を特定する形式をとり、それに比べると「京南田四十町・十町」は漠然としたものである。逆に言えば、「京南」が示す本来の場所が京南辺条であつたため、この表記で判別が可能であり、この後に条里呼称として用いられるようになった「京南」の指す範囲が広がっていったと考えられる。なぜならば、八世紀以前における「京南」の表記はこの一例のみであり、これとほぼ同時期の京南条里を示す史料では「路東」が用いられている（表3・No 3・4）。そのため、八世紀中頃の「京南」は京南辺条を指し、京南条里地区は「路東」であつた。

「京南」などの京城を中心とした地域呼称は、（1）（七六一）を所見として、平城京から遷都した後の九世紀以後においてこそ多用された。その理由は、『西大寺田園目録』に「在京東八条…」（一二九五年）とあり、八世紀から用いられている「右京」・「左京」などの表記が一五・六世紀頃においても用いられ、特に一二・三世紀には多用されていたため、平城京が遷都された後も、平城京という意識が失われなかったことによると考えられる。一方で、平城京が機能していた八世紀には、四至や「路東」により表されていた。言い換えるならば、平城京が遷都した後においてこそ、平城京をより強く認識し、その結果「京南」「京東」などの地域呼称が発生したともいえる。

そのような中で、京南辺条をあらわす史料は次の三点である。

（2）正応元年（一二八八）『西大寺田園目録』

添上郡京南一里十坪内一段十坪、辰市辺ニアリ…



(3) 正応三年(一二九〇)『西大寺田園目録』

添上郡南一条三十三坪内二段字コシタシリ字北道代：

(4) 応永一三年(一四〇六)『法花寺田畠本券』

一反 在京南辺条二里二坪之内、：

これらは字の記載と現存地名とを対比させることで京南辺条に比定されてきた史料である。(4)が「京南辺条」の初見であり、(2)・(3)では京南・南一条と表現されている。しかし、京南路東条里を示す史料において、(3)と同じような記載が見られる。それが、治承二年(一一七八)の『僧玄愉畠地売券』(『平安遺文』三八六四号)である。これには「在添上郡八嶋郷南宅条七里廿四坪：」とあり、(3)とほぼ同じ形式の条里呼称である。この史料は京南一条に比定されており、「南一条」という表現が異なる二つの条里地区で使用されていたことになるのである。つまり、京南辺条と京南条里の区別をすることが出来なかつた時期が存在していた。このことは、京南辺条と京南路東条里一条の二条分から成る条里としては南北幅が極めて長い条であつた可能性や、形態としては平城京以南の添上・添下郡を指した地域呼称であつた京南条里の一部として認識されていたことが分かる。それが一五世紀になつてはじめて「京南辺条」とされることによって、京南条里の辺にあたる条と認識され、この認識こそが他とは異なる独立した条を形成したのである。

以上から、大和盆地内における地域呼称(路東の場合)は「路東」↓(平城京造営・長岡京遷都)↓「京南」というような変化であつたが、京南辺条では「路東」↓(平城京造営)↓「京南」↓(長岡京遷都)↓(一三世紀末)一五世紀初頭の間に「京南辺」となつていたのである。

## おわりに

京南辺条が特殊とされてきた理由は、①南北四町・東西二〇町の長方形の条里地区であったことや、②変則的な里・坪番付であったこと、③盆地全域の条里地割（約一〇九m四方）に比べて若干小さい区画となっていることその他に、④平城京九条大路付近の地割偏角と同じ造営方位であることが挙げられる。井上はこの④に着目して、「京南辺条条里区の設定が京南京極の設定、すなわち平城京設定と時を同じくして、一連の計画として実施された」とする。

本稿では京南辺条の地割の規格を整理し直すことで、京南辺条という条里地区は通常の条里地区の規格とほとんど変わらないことや、一辺が六町の里に復原することができるとを指摘した。その結果、平城京造営以前のこの地域における各条里地区（京東・京南・京北条里）は、添上郡条里・添下郡条里というような郡単位で施行された条里であったと想定でき、この考えは京南辺条が平城京造営に伴って設定された条里地区であったとする見解とは異なるものである。また、京南辺条や京東・京南条里は下ツ道を基準に施行されたと考えられ、それぞれが連続した地割であったと解することができる。そのため、京南辺条は平城京の造営方位に倣ったのではなく、平城京条坊が条里の造営方位を基準に設定されたと考えられる。

条里呼称の面から見ても、添上郡と添下郡にはそれぞれ一連の条里地割が存在していたと想定できる。これは、郡ごとに条里施行を行っていた当時の原則にも違反しないものである。このように、現状地割と条里呼称の両面から見て、平城京造営以前のこの地域一帯には、添上郡条里と添下郡条里が施行されていたといえる。また、京南辺条が特殊な条里地区と認識されるようになったのは一三世紀末―一五世紀初頭までのことであり、それまでは京南条里と同じ呼称が用いられていた。

しかし、本稿でこの地域の条里の全てを明らかにし得たわけではない。京南辺条南端の古道の存在することや、これが京東条里内ではどのような形態を成したのかというように京東条里と古道敷痕跡との関係も、この地域を考える上で無視できないものである。また、この古道は京南辺条条里と添上郡京南路東条里とを分断し、この二つの条里地区間には若干のずれが認められ、京東条里の条里呼称が平城京造営に遡る可能性があり、これに対して路東条里ではあらたに一条から条が始まることなどである。以上の点は、京南辺条南端の古道敷痕跡の南北で条里地割としての連続性があるのかという問題を含んでいる。また、本稿では条里と条坊について、南北地割線が整合する点から論じたのみであり、東西地割線との関係は明らかに出来なかったことや奈良盆地北西部（平城京右京・京北条里・京南路西条里）にまで考察が及ばなかったことなど、多くの問題点を残してはいるが、これらは今後の課題としたい。

付記 本稿は、佛敎大学が二〇〇三年一月に実施した、第二三回地理・歴史巡検（於大和郡山市）の現地発表をもとにまとめたものである。様々な点において先学に倣う点が多く、新たな知見や発展的な議論を提示することが出来たかどうか心もとないものとなってしまった。未熟な点も数多くあるかと存じ、多くの叱責を請い、稿を終える。

本稿を草するにあたり、大和郡山市柳沢文庫・大和郡山市立図書館の方々に大変お世話になったことをこの場を借りて感謝の意を表したい。

註

(1) 嘉永五年(一八五二)、北浦定政(一八一七)一八七

一)は現地調査によつて『平城京大内裏跡坪割図』『大和国班田略図』を作製し、後に『大和国坪割細見図』を記す。

(2) 関野貞『平城京及大内裏考』、東京帝国大学紀要工科第三冊、一九〇七年。喜田貞吉『平城京の四至を論ず』、歴史地理八卷二五・七九号、一九〇六年。同『平城京及大内裏考』評論、歴史地理一二卷二六号・一三卷二五、一九〇八―一九〇九年。

(3) 藤田元春『地割考』、尺度綜考、刀江書院、一九二九年。米倉二郎『東亜の集落』、古今書院、一九六〇年(同「農村計画としての条里制」地理論叢一、一九三二年。同「律令時代初期の村落」地理論叢二、一九三三年などを収録)。田村吉永『大和平野における条里制実施の年代』大和志九卷八号、一九四二年。竹内理三『条里制の起源』日本歴史二三号、一九五〇年。など。

(4) 秋山日出男『大和国条里推定復原図』(図説日本文化史体系三、小学館、一九五六年)。

(5) ①米倉次郎『集落の歴史地理』、帝国書院、一九四九年。②同『東亜の集落』、古今書院、一九六〇年。③秋山日出男『平城京の特殊条里』(近畿古文化論考、吉川弘文館、一九六二年。④同『条里制地割の施行起源』(『日本古文化論攷』、檀原考古学研究所、一九七〇年。⑤千田稔『下ツ道北部における路東条里と路西条里の一町の齟齬に関する問題について』、環境文化四〇号、

一九七九年。など。特に、大和国条里の研究史・問題については岩本次郎により詳しくまとめられている(⑥奈良県教育委員会編、『奈良県史』条里編、一九八七年)。

(6) 奈良県立檀原考古学研究所編『大和国条里復原図』、奈良県教育委員会、一九八〇年。

(7) 井上和人『条里制と開発の歴史―条里地割の施行年代をめぐる―』、月刊文化財三九八号、一九九六年、三一―三九頁。

(8) 前掲(7)。井上和人『条里制地割施行年代考』、古代都城制条里制の実証的研究、学生社、二〇〇四年、四〇三―五三二頁(筆者は未読であるが、これは「条里制研究の一視点―奈良盆地における条里地割施工年代についての再検討―」、静郵社、一九九四年を再録したものとある)。

(9) ①岩本次郎『平城京南特殊条里の一考察』日本歴史三八七号、一九八〇年。②同『平城京と京東条里』(直木孝次郎先生古稀記念会編『古代史論集』上、塙書房、一九八八年。③前掲(8)、井上(二〇〇四)。

(10) 前掲(5)④、四六七頁。

(11) 岩本が道路敷痕跡と呼んでいる地割は、『小字限図』(『奈良県史』73頁所収図)や『大和郡山市地番図』(大和郡山市柳沢文庫所蔵)などに带状地割が東西に連続し、そこには「道代」「大道ノ上」「高縄手」などの古道に関連すると考えられている小字が散見する(前掲(9)①)。

(12) 阿部義平『藤原京・平城京の構造』(広瀬和雄・小路

田泰直編『古代王権の空間支配』青木書店、二〇〇三年、八七～九〇頁。

- (13) 前掲(8)、四五四・五〇八～五〇九頁。なお、この書は井上が一九八四～二〇〇四年に記した奈良盆地の条里と条坊に関する論文を修めた書である。

- (14) 井上和人「平城京羅城門再考—平城京の羅城門・羅城と京南辺条条里」、『古代都城制条里制の実証的研究』、学生社、二〇〇四年、二四一～二八五頁(条里制古代都市研究一四号、一九九八年掲載のものを再録)。

- (15) 本図は、奈良国立文化財研究所編『平城京条坊総合地図』(同研究所発行、二〇〇三年)をもとに作製した。なお、『平城京条坊総合地図』は一九六二年撮影の空中写真を地図化(千分之一)したものをベースマップとしている。

- (16) ①木全敬蔵「条里地割の計測と解析」(木村芳一編『奈良県史』四巻条里編、一九八六年)、九九～一二一頁。②山中章『日本古代都城の研究』柏書房、一九九七年、五八～七二頁。南北地割線は北から西に測った偏角、東西地割線は北から東に測った偏角を示す。

- (17) 前掲(14)、二五六・二七〇頁。

- (18) ここに示した地割の偏角は作図する精度の都合により、図中では南北地割線は〇度一八分、東西地割線は八九度一八分などとした。

- (19) 柳沢文庫所蔵「1/1,000大和郡山市地番図(二)」、大和郡山市。

- (20) 前掲(15)。

- (21) 本稿において求めた、京南辺条における地割辺長は、

南北地割線が東西二〇坪の各坪界線(二一ヶ所)、東西地割線が南北四坪の各坪界線(五箇所)の平均値である。ただし、地割が不明瞭な地点に関してはこの限りではない。

- (22) 東堀川は一九七五年の平城京左京八条三坊一〇坪の調査において検出された幅約一〇mの溝遺構である(奈良国立文化財研究所編『平城京左京八条三坊発掘調査概報 東市周辺東北地域の調査』、奈良県、一九七六年)。

- (23) 前掲(5)③、(8)、(9)①。

- (24) 前掲(14)、二六四～二六八頁。

- (25) 井上は、五徳池は長安の苑池の1つであった曲江池を模して掘削されたとして、その西側に離宮などの施設が存在していたと考えている。

- (26) 大和国内で、条里地割から幅員が除外されている古道は下ツ道や横大路、京南辺条南端の古道などが挙げられる。これに対して、中ツ道の大部分は条里地割(坪)の中にその幅員が組み込まれている(前掲(16)①)。ある地域に古代官道が存在した場合、その幅員は隣接する条里地割から完全に除外される場合とそうでない場合とがある。その違いが何によるものであるかを示すことは出来ないが、こうした状況は全国で見られ、大和国においても例外ではない。また、前者は条里地割全体に影響するため、広域に、後者は隣接する坪に影響を及ぼす。そのため、どちらの形状にしろ、古代官道は条里地割を規制して敷設されていた。

(27) この数値は、条里地割の規格よりも約二m長いが、京

東条里の条里地割は京南条里のものよりも若干辺長が長いという報告や、地形的な要素もあり、奈良盆地全体の条里地割が厳密に統一された規格であったわけではないとされている(前掲(8)、四八七頁)。

(28) 前掲(8)、五〇八〜五〇九頁。

(29) 東西里界線・偏角 $\parallel$ 八九度一八分／一町 $\parallel$ 約一〇九・五m、南北地割線・偏角 $\parallel$ 〇度一八分／一町 $\parallel$ 一〇九・二m。偏角は京南辺条の造営方位、辺長は盆地全域の条里地割の平均値を参考に作成した(前掲(16)①、一〇二〜一〇六頁)。

(30) 大安寺の寺域は左京六条四坊に位置し、東西三町、南北四町分であったといわれている。

(31) 発掘調査の成果により、朱雀大路はその両側に約八八・四四m(二五〇大尺)の間隔で築地が設けられていたことが知られている。その内側の朱雀大路側溝心々間距離は約七四・二四m(二一〇大尺)であったと考えられている(前掲(14)、二四六〜二五二頁)。現状の朱雀大路地割の幅員は約九〇mであるため、東西築地間の距離が地割として遺されたと考えられる。

(32) 前掲(16)②、五八頁。

(33) 金田章裕は条里地割と条里呼称法からなる土地表示システムを「条里プラン」と呼ぶ。径溝や畦畔が存在しない場合でも手続き・記録上において、地割を伴った条里呼称法と同様の扱いで、条里プランが展開していたとする(金田章裕『古代日本の景観 方格プランの生態と認

識、吉川弘文館、一九九三年)。

(34) 『大日本古文書』六巻、五九七頁。宝龜八年(七七七) 民部省膳川原寺三網所(『大日本古文書』六巻、五九八頁)。もこれとほぼ同じ内容の記載が見られる。

(35) 金田章裕「条里プランと小字地名」、人文地理三四巻三号、一九八二年、一〜三頁。

(36) 天平一〇年(七三八) 法隆寺伽藍縁起并流記資財帳(『寧良遺文』中巻、三六三頁)、天平宝字五年(七六一) 大和国十市郡池上郷屋地売買券(『大日本古文書』四巻、五二〇頁)、天平宝字五年(七六一) 十市郡司解申立売買地券事(『寧良遺文』中巻、六四四頁)が挙げられる。なお、後二者はほぼ同じ内容のものである。

(37) 黒板勝美編『類従三代格』後編、吉川弘文館、一九七七年、四四五頁。

(38) 前掲(8)、五〇〇頁。

(39) 大同元年(八〇六)『大和国添下郡司解』、元慶三年(八七九)『大和国矢田郷長解』、弘安三年(一二八〇)『永仁六年(一二九八)『西大寺田園目録』、応永一三年(一四〇六)『法花寺田畠本券』など。これらの史料とともに、大和国の条里に関する史料は、前掲(5)、⑥『奈良県史』条里編に収められている。

(40) 『類従三代格』神護景雲元年(七六七)条、宝龜八年(七七七)『民部省膳川原寺三網所』。これ以後「路東」の語が用いられているのは、建長四年(一二五二)『僧専玄田地売券』の一例のみである。

(41) 京南辺条は七里まで存在しておらず、京南一条七里に

は小字「ヤセノ垣内」が存在するため、この史料は京南条里を指すと考えられる。

